

1

乗馬

湯

調整

2

道路

王様

港

2

ウ

学校

図書館

ア

イ

6 I

密閉

II

ポンポンと

7 I

きれい

II

学校に行かない

8

つたのだ。

9

を開けた。

3

1

工

2 I

酸素を取りこむ

II

吸収し

(5 完 答)

5

I  
ウ

III

ア

6

海水と

3

支柱根

4

あらわ

7

そして

8 I

2

II

1

III

2

| 配点      |            |
|---------|------------|
| 1       | 各2点×6=12点  |
| 2・3     | 各4点×22=88点 |
| 〈計〉100点 |            |

1

「乗」の下の部分を「木」のように書かないようにしよう。

2 「湯」の右側の部分を「易」のように書かないようにしよう。

3 どちらも「ととのえる」という訓読みを持つ。その違いを調べてみよう。

4 「路」のあしへんを「足」のように書かないように六画目と七画目に注意して書こう。

5 「様」の十画目は三本の横棒を全てつらぬくことに注意しよう。

6 「港」の右上部の横棒は二本である。三本にしないように。細かな字形にも気をつけてほしい。

2

1 本文二行目や、五行目から七行目に書かれてあるようなことを言われて「怒りと不快感でいっぱいになっ」たことをおさえておきたい。「フトウコウ」という言葉が草子にとってどういうものであったかは、本文終わりから八行目に書かれてある。また、「フトウコウ」で「あとでこまるのはじぶん」、つまり「学校に行きなさい」と暗に言っているわけだが、「親御さんは、そのことなにもおっしやらないの」から両親への非難が含まれていることを感じられたらどうか。ウは本文四行目に「いつも草子を見ている」とあるが、いつも見ているのであれば今回見られたからといってこのような気持ちにはならないだろう。

2 草子がどういう状況であるかを考えれば、両親が言わないことが何かはイメージできたであろう。

3 「学校に行ってほしい」という両親の本音」が家にいたら見えてしまうからこそ、どこにいるのか。草子がどこにいるのか、深津さんが何者なのかを考えていけばよい。

4 ウと答えなくなったかもしれないが、これは小学校のころの知り合いの男の子が先生に向かって言っていた言葉である。また、線④の直後に「同じ言葉」とあって、これが「うるせえ、くそババア」なので、ウはふさわしくない。

5 線⑤の後を読み進めていけば、草子の探していた本が見つかったから、声をかけたわけではないことはわかっただろう。草子が「うるせえ、くそババア」と「くちびるを開きかけたとき」に声をかけている。また、「ふいに涙がこみ上げてきた」(ということはまだ泣いてはいない)草子をフロアのはし(にあるドアのなかのうす暗い階段)につれていき、ポケットティッシュと水筒をわたしている。草子の気持ちを先回りして察することができているからこそその対応だと言えるだろう。

6 I 設問文を丁寧に読み、「たとえ」を使う時にはどのように表現するかを考えればよい。直前に「まるで〜みたいに」とあった。また、「ひどくつかれる」「とてもつかれる」「ひどく息苦しい」と感じるような場所であるということも手がかりになるだろう。

II 「教室」の空気を説明している部分を聞かれているのだから、「クラスメート」や「先生」という言葉には注目したい。「ポンポンと飛びかうたあいもない言葉」が「クラスメート」どうしの会話であることをイメージできただろうか。

7 草子は、学校も、教室も、学校に行けない自分も、不登校という言葉もきらいなのだが、それら、つまり不登校である理由をきらいという言葉以外で説明できないのである。線⑦の二行前「行きたくない。行きたくない。きらい、きらい」からもそれが読み取れたであろう。

8 文学的文章では、登場人物が過去のことに思いをめぐらせる「回想」がよく描かれる。明らかに時間や場所や視点人物が変わったと感じたときは「回想」ではないかと考えながら読むようにしてほしい。図書館で深津さんと話していた場面から、学校に行かなくなった理由を聞かれた時のことを思い出し、また図書館での場面にもどっていた。

9 いわゆる脱文補充の問題は、ぬけている文に答えへの手がかりがあることが多い。この問題では「階段」という言葉に注目してほしい。本文終わりから十行目に「図書館の奥のうす暗い階段」と書かれてあった。さらに本文終わりから二行目に「ドアからすべり出る」とあった。ドアの向こうに階段があるということである。

3

1 普段から音読に取り組んでいれば簡単に答えられたらう。「多くの植物が、海水のように塩分はこい水を」とした場合に違和感を覚えることができただろうか。

2 線①を含む一文をしつかりと読むと、線①が「なぜ塩分がこい水を吸収しているはずなのにかれないのか」「なぜずっと水につかっているはずなのに呼吸ができていいのか」という問いかけだということがわかる。あとはそれに対する答えをさがしていけばよい。線①の直後の段落が「呼吸根」について、線④の直前の段落が「海水を吸ってもかれない」しくみに書いて書かれていた。

3 「たおれずにしつかりと立つための工夫」はこの段落にしか書かれていなかった。そもそも、その工夫を種や葉がすることは難しいだろう。

4 「あらわ」とは「隠されていたことが表に出る様子」を表す。

5 「種にも持ちようがある↓細かい形をしていて、真下に落ちる↓地面につきさされば発芽するが、ささらなければ流されたり食べられたりする↓流されても成長することもある」のようになる。それぞれの文のつながりを意識してほしい。

6 線④が、マングローブの生える場所をあらわしていることはわかっただろうか。本文からそれが書かれているところをさがすわけだが、線①よりあとは、マングローブの持つ持ちようの話が続いていたのだから、ここより前をまずはさがしてほしい。すると、本文四行目から五行目に「マングローブとは、木の種類の名前ではなく、熱帯や亜熱帯の地域にある河口や沿岸、つまり、海水と淡水が混じり合う場所に生えている植物を全部まとめた呼び方です」とあった。

7 線⑤を含んでいる段落が「生物多様性」の説明になっている。マングローブがさまざまな動植物とかわりを持っていることを説明しているところをさがそう。

8 I マングローブの根は「干潮で海の水が引いたとき、地上に出るようになっていきます」とあった。

II 本文十八行目から十九行目に書かれてあった。

III マングローブの森は「生物多様性」の一つの例であり、それが「生物多様性」を守るための手段ではない。以上